



第五卷  
第三號

目次

國民精神總動員強化 酒井校長

戰線だより 岡 俊雄

祭文弔詞 波多野幸治

郷里はいま秋です 竹島探險記 三輪卓雨

慰問文 應召軍人氏名報告欄

# 國民精神總動員運動強化

酒井校長

支那事變の推移は愈々進展して我が忠勇果敢なる將兵各位の力戰奮闘により驚くべき戦果を見るに至つた。即ち武漢三鎮を目標して攻略せる我が部隊は江北に於ては武漢前衛の要地たる信陽を已に陥落せしめ、江南に於ては瑞昌を屠り廬山を抜き徳安に迫り、永修南昌の攻略も眼前に在り、陽新亦我が手中に歸せんとす。かくて武漢三鎮指顧の裏に總攻撃開始せられんとす。此の間に於ける我が將兵各位の千辛万苦は筆舌の及ぶ所でない。

今回の事變は實に皇國興廢の分るゝ所大和民族發展の一大轉期であり、皇國精神を世界に宣布し八紘一宇の大精神を顯揚すべき絶好の機會である。國を賭して戦ふべき秋である。嘯りついても勝たねばならぬ戦である。十年二十年の長

期に亘つても決して怯んではならない。今日程國民精神總動員運動を強調すべき時はない。何と云つても燃ゆる如き盡忠報國の大精神の下に舉國一心となり初一念の貫徹に當らねばならぬ。衆心成城といへるが如く堅忍持久の不拔の精神と皇國振興の愛國的信念に基き確固不動不退轉の大勇猛心を以て時局に當らねばならぬ。恐るべきは時局の認識を忘れたる懈怠心であり、誤れる唯物史觀に立つ個人主義享樂主義である。世界大戦に於ける戦敗は武力戦ではない、全く國民の思想的混亂に基因してゐるのである。思をこゝに致すときに我等銃後國民の最も戒心せねばならぬ所である故に我等國民は時局に對する認識を深め今回事變の眞意義を闡明して或は思想方面に於ては外來の誤れる自由主義個人主義的思想を蟬脱して、皇國本來の皇道に基き建國の大理想實現に邁進し皇國を磐石の安きに置かんとする金剛不壞の大精神に生きねばならぬ。或は經濟方面に於ても勤儉産を治むると共に資源の開發に力め生産の擴充を圖り以て戦果を收め所期の目的を貫徹せねばならないのである。

こゝに於て我等銃後にあるもの今一層眞剣となり各々課せられたる職責や各人の本務を完全に果すと共に向進んで銃後の後援に精進し、戦歿將兵に對する感謝慰靈は勿論第一線勇士の勳功を讃仰し出でゝは勤勞奉仕を行ひ、入りては隣保相扶の誠を致し傷病兵各位を慰安し應召家庭を懇切にねぎらふ等後顧の憂なからしむるため万全を期せねばならぬ。

戦地に在る將兵各位の絶大なる勞苦を思へば銃後の我々は粉骨碎身奉公の誠を致さねば實に濟まないのである。

斯くしてこそこの歴史的壯舉に對して國民總動員の實を擧げ所期の目的を達成せしむることが出来るのである。

中井先生

竹島探検記

(上)

五年 三輪卓爾

中井先生の竹島のお話を纏める様に、と云ふ安藤先生のお言葉により、私は九月のある夜中井先生のお宅へ伺つた。先生は「日支事變で多くの人の嘗めてゐる経験に比べたら私の竹島の思ひ出等を三十年にもなる今日話すのはどうかと思ふのですが、」と前提して次の様なお話を下さつた。元山と隠岐とウラジオストツクの間、日本海の絶島である水もない竹島の探検記——唯息話る様な先生のお話の味を十分移し得なかつたのは偏へに小生の罪で先生及び讀者に深くおわびする次第である。

まづ私は私が竹島行を思ひ立つた動機から話さねばならない。

當時私は美術學校在學中であつたが有田前外相の實弟が私の一級上に居てこの人が丁度その頃、全くの外地であつた南洋群島を旅行して歸つて來た。

これに刺戟されて私も一時南洋行を思ひ立つたのであるが、その頃私の描いた「あしか獵」と云ふ作品が教授間に評判がよく、又親戚のものが竹島のあしかれふをやつて居たので、原始的

なもの、描きたい欲望を抱いてゐた私はいつて竹島行を思ひ立つたのである

美校の暑休は三ヶ月であつた。

私は五月十日頃隠岐に渡り、色々の準備にとりかゝつた。志賀重昂氏の著書「日本風景論」によつて、私は寫眞機、果物罐詰、砂糖、ミルク、熱下痢の薬、石油、毛布、氷枕、それに畫具一式等を用意した。

明治四十二年六月二十六日、竹島に残つてゐる七人の漁夫を迎へに行く筈の山陰最初のさる漁業會社の發動機船に乗込んで、私は勇躍出帆した。

船長以下七人の船員達の家族はその日訣別の宴を開いて水盃を交した。暗い夜であつた。

隠岐の差向から船は出た。船員の家族は、白い布を振り乍ら西郷の港の方まで陸の上をついて來た。

見送りの人の姿が次第に小さくなるのを船員はマストに登つて別れを惜んだ。

島前島後の間邊り夜が白々と明け始めた。強い南風が吹いて波が高く、航海を中止して島前に避難しようとするふ者があつたけれども私は「追風だから大丈夫だらう。」と云ふ船長の言を聞いてとうとう無理に航海を繼續して貰つた。

夜がすつかり明け放つた頃、島前の島影が次第に小さくなつて行つた。十海里も行くとも舟も居らず島も殆ど見えな。そして島の姿はやがて拳程の

大きさと成り、船尾に立つて眺めてゐる私達の視界からとうとう去つて了つた。數千トンの大洋航行船に居てさへも、富士山が見えなくなつた時船客は何とも云へぬ感じに打たれて姑し一言



(竹島全景)

も發しないと云ふ。まして私達の船は僅か十トンの小船、島後が終に見えなくなつて東西南北唯水平線を望むのみとなつた瞬間、私は名狀し難い寂莫の感を覺えたのである。

發動機と帆と兩方を働かせて船は矢の如く進んだ安物の磁石一つしか無い我々は只北へ北へと針路を向けてゐたやがて廿七日が暮れると、美しい日没後間もなく月が出た。やはり南風の

ため波が高くて、暖い船の中は苦しいので、私は甲板の上の板に身体を縛りつけて寝た。

この夜は波の爲に、水平装置のない磁石は針が働かず唯中天に懸る北斗を目あてに北進するのみであつた。

あくれば廿八日、夕方になれば見える筈の島影がどうしても見えない。帆船で二週間も漂つた末、遂に島を發見し得ずしてやつと但馬海岸に漂着したやはり倉吉の人もあることゝて、大いに憂慮して居た時、後方を眺めてゐた一番若年の船員が突然「見えました、見えました！」と聲を擧げた。指すのはとんでもない船尾の方向である。すわ、とばかり双眼鏡を持つて飛んで行くと、遙かの水平線上に岩らしいものが二つ並んで見えた。

占めた！私達は右方を迂回して反對側から入ることにした。方向をかへて船は次第に島へ近づく。大分近付いた頃船員が豆腐屋の喇叭を吹く。嘯唳たるその音が夕方の空氣を振はすと、數人の漁夫達がばらばらと岸邊に駆け出して來た。

彼等は身に一条もすはす、髪や鬚をばうくと生してゐた。

上陸すると、加藤と云ふ人は彼等に「この船は君等を迎へに來たのだが、實は今度繪を描く旦那を一人連れて來たからもう姑く我慢して世話して上げて貰ひたい。」と告げた。

私の荷を下して、島でこの時迄に取

つた「あしか」の皮數百枚をつみ込むと、船は一ヶ月後を約して又隠岐をさして出帆して行つた。

私は島に第一歩を印した。人夫達の小屋に行く途中にはあしかの白い骨が散ばつてゐた。空には鎌のやうな月が出てゐた。

日本海の孤島にやつて来て、かうした物凄い夕べに石原を歩いて行き乍ら私は中學三年のとき讀んだロビンソンクルウソーを思ひ出して自分も一個の英雄になつた如く感じた。

小屋は斷崖を一寸入つた巖窟の傍にあつた。小さいランプの下で、挨拶をすますと、私は人夫達への土産として日本酒の二斗樽を二つと、隠岐から持つて來た野菜や果物を出した。

やがて酒宴が初つて、私達はあしかの聲を聞き乍らとう／＼一晚を飲み明した。貯蓄心のある者ならば、四斗の酒を貰つて一人一合として優に一月はある筈である。

然し、「いたこ一枚下は地獄」と云ふ彼等の腦裡には一月後など、云ふ物はない。丸三日の間、彼等は仕事もせず飲み暮して、遂に一滴も餘さず平げて了つたのである。

この邊りで私は竹島が如何なる島であるか説明する必要があると思ふ。

本州から百四十海里、東京と八丈島ばかり隔つた渺茫たる海中にあるこの孤島は、佛人リヤンタールの發見に係り、それを日露役や、前にわが國が領

土としたのである。

南北二つの島から成つてゐて、北の方は高さ三百尺、南の方は二百尺、島の周圍には到る所に洞窟があり、アラピアンナイトにでも出て來る島を思ひ出させる。

南北兩島の間には約二丁の海峡があり、島には蓬のやうな草と、私の行つたとき丁度満開であつた赤い百合がある丈で木は一本もない。

平地と云へば海峡に沿うて小屋の周圍に、巾七間、長さ三十間の石原ある



(竹島のあしか)

のみで、あとは唯峻峻な巖が屹立して居る。その嶮しさは、北の島の頂には

人は全然上れず、南の島頂に辛うじて上れると云ふ程である。それも切り立つた崖を五丈這ひ上つて、誰が如何にして作つたかわからぬ崖の黴にかゝつた電線の吊り橋を二ヶ所渡らねばならぬので大てい人は參つて了ふ。これを渡つて西の端に出ると山に登る道が有が、之又頗る急で兩側は馬の背の如く一度滑つたが最後、百尺下の海に吸ひ込れて藻屑とならねばならない。

しかもこの坂道の岩が數千年風雨に曝されて非常にもろく手懸りにしようとするれば、すぐ崩れて了ふ、崩れた巨巖は落ちる途中數百の岩となつてがら／＼と音を立て、數十丈下の海にころがり落ちる。

かうした經驗をして私は二度雨の島の頂上につた。頂上には日本海々戦後我が海軍が建設せんとして中途に放棄した望樓が立つてゐた。

島には全然飲料水がなくて、私共はこの望樓のあとの風呂桶大のタンクにある、一年中の雨雪のたまり水で虫が湧いてさながら黒ビールの如き水を時々薬罐で運んで來て飲まねばならなかつた。この巖窟の島は世界に四つしかない「あしか」と海猫の生産地である私の行つた當時あしかは五、六萬頭あるものと推算したが、海猫の方は全く無數に棲息してゐた。斷崖絶壁の上の方に段があつた。海猫はこの段に卵を生むので、内地に飛來する海猫は大概

この産である。海猫が卵を産む頃は人夫達は二百も三百も取つて來て食べ、又、比處のあしかは遠く内地、朝鮮、露領沿海州迄も散ばつてゐるが、巖窟ばかりのこの島は、彼等の繁殖に適した屈境の要害地で、樺太の海豹島と共に日本に二つしかない「あしか」の住家である。この動物は一夫多妻であつて毎年五月牡は牝を奪はんとして大争闘を展開する。

この頃が絶好の「あしか」獵期で、樺の木のパットを手にした人夫はこの争奪戦の中に躍り込んで先づ雙方の牡を屠り、次から次へとパットを振つて遂に一日數百頭の「あしか」を血祭にあげる。これが五月に於ける獵の方法であるが、私の行つたのは六月下旬であつた爲、さう簡単に多數のあしかを獵することは出来なかつた。

竹島に滞在した三ヶ月の間に血氣盛りの私が經驗した「あしか」獵、洞窟探検、饑退治等についてこれからお話することにしよう。

(つづく)



報 告 欄

同窓會員中  
戰死者慰靈祭

七月十八日、同窓會員中の戰死者左記十一柱の英靈に對し神式を以て壯嚴なる慰靈祭が舉行された。

- 故村木勝利氏(十四回) 金田弘樹氏(九回)
- 里田稔氏(九回) 大嘉義正氏(二十回)
- 賀須井良雄氏(廿回) 田中岩男氏(廿回)
- 浪花角雄氏(廿回) 天野輝雄氏(廿回)
- 門田隆博氏(廿回) 羽合利博氏(廿回)
- 廣富理氏(廿回)

列席者は職員生徒、同窓生、遺族、來賓等約八五〇名、祭壇上に遺影及遺品を安置し、奏樂の中に祭典が始つた。式次第は左の通りであつた。

降神、献饌、齋主祭文、主祭者祭文、來賓弔詞(松江聯隊區司令官、倉吉町長)同窓會總代、生徒總代、弔電、玉串奉奠、撤饌、昇神、式終、主祭者挨拶、遺族挨拶

新任(九月)

鐵本 教諭  
本郡出身、教練科擔任として就任せらる

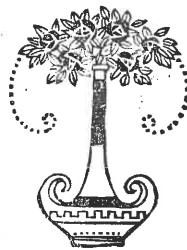
竹本 教諭  
香川縣女子師範學校より轉任せらる、數學科擔任

轉任(八月)

藤原(光明)教諭  
朝鮮京城府京畿中學校に轉任せらる

退職(九月)

松本(健一郎)教諭  
今回大阪住友に入社の爲退職せらる



倉中籠球部優勝

九月十、十一日兩日倉中籠球部は松江高校主催近縣中等學校籠球選手權大會に於て松江商業、米子商蠶、島根師範を破つて堂々と優勝せり。

正選手 五年

- C 石田昇
- L.G 杉川喜代美
- L.F 秋田彌太郎
- R.G 福井雪秋
- R.F 矢田次夫

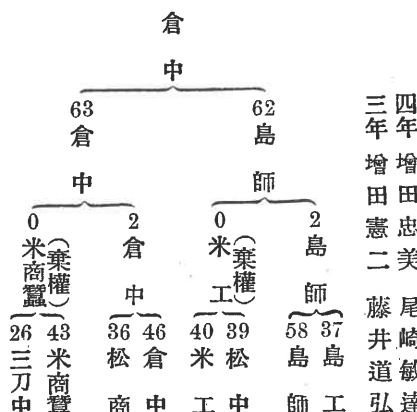
得点狀況

中倉	27
師島	40
	29
	42
	31
	44
	33
	35
	46
	37
	39
	41
	43
	47
	45
	47
	49
	48
	50
	52
	54
	56
	51
	53
	55
	57
	58
	59
	60
	62
	61
	63
六三	六三

銃後援標語選

- 固き銃後に輝く戦果 五年 最上 實
- いたわれ傷兵護れよ遺族 四年 中井 光
- 慰問袋に銃後は光る 五年 徳吉英雄
- 出すな無駄金送れよ慰問 三年 河島宮久

補



編輯後記

七月十八日の同窓會で決議された「櫻友」の編輯を漸く十月の末に刊行するとは誠に遷延の甚しいもので、或る人の如きは決議した事さへ忘れて居ると云ふ状態である。

併し原稿を集める方ではやはり集まる時でなくては集まらないといふ具合でとうとうかやうに遅くなつたのでありますから何卒御容赦を願ひたいと思ひます。

中井先生の竹島話は有名なものであるが、活字になつたのは始めて同窓生諸君の感慨深きものがあること、信じてます。且つ挿畫は中井先生自身刀を執つてゴムリニームに印刷せられたものでありますから中々興味の津々たるものです。

出征軍人調査は調査してゐる中に次々と應召者があり又、調査の手落もあつて困つてゐます。粗漏の点は御容赦を御願ひ申し上げます。(編者)

昭和三十三年十月廿九日印刷  
昭和三十三年十月卅一日發行 【非賣品】

- 編輯兼 倉吉町西町 安藤重良
- 發行者 倉吉町魚町 林 歲 勝
- 印刷者 倉吉町魚町 東伯印刷所
- 印刷所 東伯印刷所
- 發行所 鳥取縣立倉吉中學校友會